

# スポーツユートピア

流通科学大学山口ゼミ

○宗利萌 土江直人 渡邊文 寺岡和哉 大西邑治 小椋一輝

## 1. 緒言

2020年夏季オリンピック・パラリンピック競技大会が東京に決定し、「スポーツツーリズム」という言葉をよく耳にするようになった。2008年に観光庁が設置されて以来、観光立国を目指すわが国にとって、スポーツツーリズムの推進は地域活性化の新たな起爆剤となっている（原田，2012）。2012年に一般社団法人日本ツーリズム推進機構が設立されて以来、スポーツ合宿の誘致やスポーツコミッションの設置が全国各地において進められるなど、スポーツツーリズムの周辺産業は慌ただしさを増している（山口ら，2015）。

そうした中、スポーツツーリズムを推進する一つの成功事例として、スポーツアイランド沖縄がある（一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー，2015）。スポーツアイランド沖縄は、年間を通じて温暖な気候を活かし四季を問わず一年中さまざまなスポーツを楽しむことができる。成功要因として、さまざまなスポーツイベントの招致やプロ野球やJリーグクラブがキャンプに訪れ成果を収めている。

ユートピアとは、現実には存在しない、理想的な世界をいい、理想郷、無何有郷などと訳されている。ユートピアの観念は、人間の自然な感情として普遍的にいだかれうるものであるが、同時に特定の内実をもった思想的表明、もしくは運動をうみ出す。そこで、映画「テルマエ・ロマエ」のような世界観を「スポーツアイランド」として、子どもの未来のために実現できないかと考え、スポーツユートピアというタイトルを設定した。

## 2. 仮説

なぜスポーツをほとんどしない子どもが増加しているのだろうか。子ども自身が体を動かすことの楽しさや、喜びに魅力を感じていないのだろうか。子どもたちの生活の場である地域におけるスポーツ活動を充実していくことが重要であるが、文部科学省（2013）の「体力・スポーツに関する世論調査」によると、多くの大人が自らの子ども時代と比べて、子どものスポーツ環境が悪くなったと考えている。また、子どもの多くはスポーツ機会が増えることを望んでいることを報告している。そこで、沖縄にスポーツアイランドがあるように兵庫県の淡路島に子どもを対象とした、スポーツアイランド淡路を作り、種目関係なく誰でもどの競技に参加できるテーマパーク化したスポーツアイランドを作ることを私たちは考えた。

## 3. 現状

### 3.1. 子どものスポーツ機会の充実～

まず、スポーツは子どもにとって生涯にわたってたくましく生きるための健康や体力の基礎を培うとともに、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培うなど人間形成に重要な役割を果たすものである（文部科学省，2012）。子どもの体力に関して、文部科学省（2015）が実施している「平成 26 年度体力・運動能力調査」によると、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、基礎的運動能力は低い状態であることが報告されている。その理由として、近年積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化が顕著に見られるためである。小学校では、教員の高齢化が進む中で、多くの教員が全教科を指導しており、教員が体育の授業に不安を抱えている（文部科学省，2015）など、専門性を重視した指導が十分に実施されていないのが現状である。

笹川スポーツ財団（2014）によると、4～9 歳の約半数（52.7%）が、週 7 回以上スポーツを実施しているのに対し、過去 1 年間まったくスポーツを行わなかった人が 1.8% であることが報告されている（図 1）。したがって、「スポーツアイランド淡路」を作ることにより、スポーツが苦手な子どもに運動好きになってもらうためのきっかけづくりを提供するとともに、身体を動かすことの楽しさや、試合に勝つことの喜びを感じてもらうことが可能となる。そうした取り組みを通し、子どもたちの豊かな人間性や社会性を育むことができる。また、スポーツアイランド淡路を作ることにより、子どもの居住地だけでは不足しがちなスポーツ機会を増加させる可能性も秘めている。

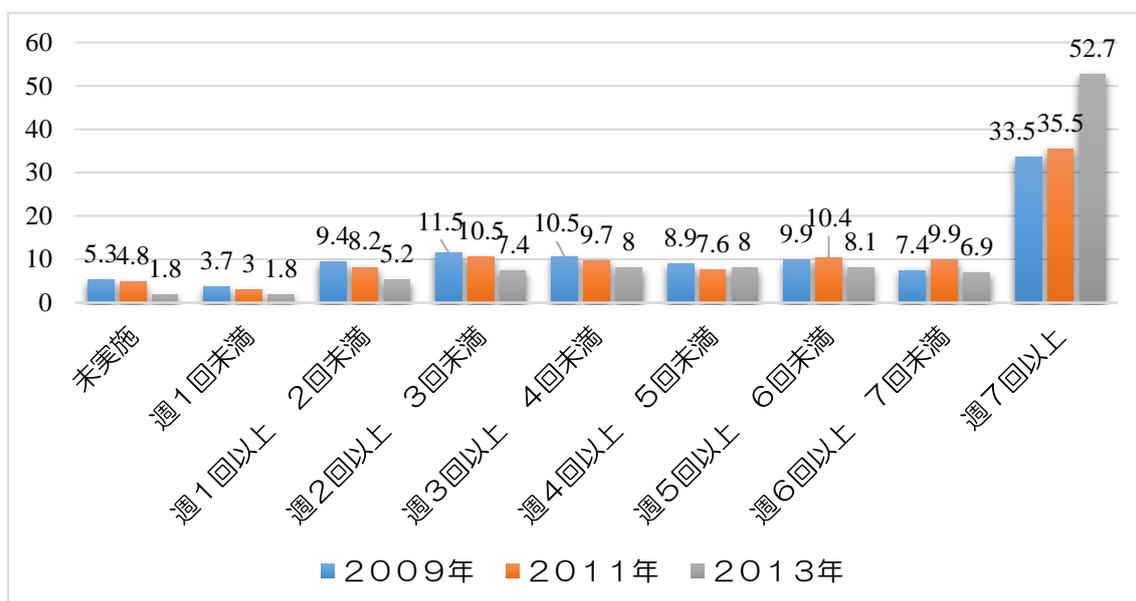


図 1 子ども（4～9 歳）のスポーツ実施率

資料：笹川スポーツ財団「4～9 歳のスポーツライフに関する調査」2013

#### 4. 平成 26 年度兵庫県観光客動態調査結果

平成 26 年度に兵庫県を訪れた観光入込み客数は 1 億 3,325 万 6,000 人となり、前年度

(1億3,127万2,000人)に比べて298万4,000人に増加している。地域別の主な増加要因を見てみると、淡路は明石海峡大橋の通行料金の値下げや桂文枝を起用した淡路島誘客キャンペーン効果、調査対象地点に淡路ハイウェイオアシスを追加したことなどにより、大幅に増加したことが報告されている。日帰り・宿泊別については、平成25年度に日帰り客が83万9,000人(構成比85.6%)に対し、平成26年度には114万3,000人(構成比89.9%)と増加傾向にある(図2)。しかしながら、宿泊客数は平成25年度141万人(構成比14.4%)に対し、平成26年度は130万人(構成比10.2%)と減少している(図3)。

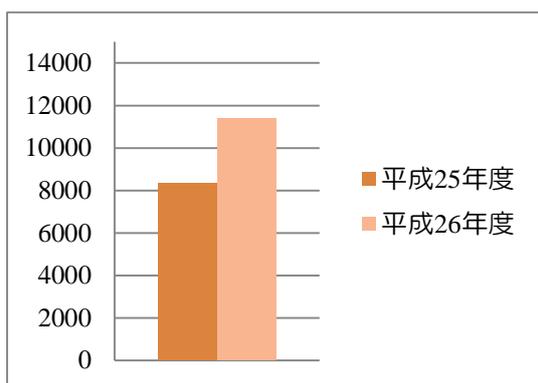


図2 淡路島日帰り観光客入込数

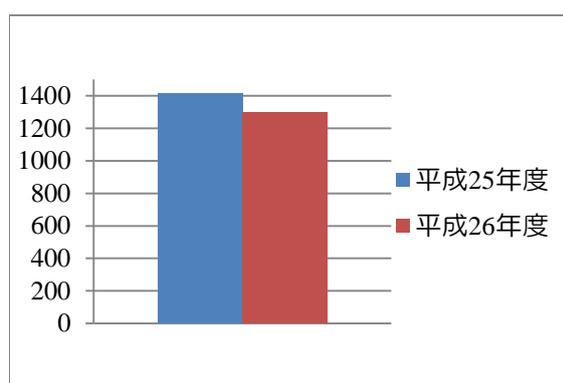


図3 淡路島宿泊観光客入込数

資料：平成26年度兵庫県観光客動態調査結果

一方、日帰りで観光が可能なあわじ花さじき、淡路ファームパークイングランドの丘、淡路島バーガーや渦潮などがメディアで広く取り上げられた道の駅うずしおにおいて観光客の増加がみられる。そして、平成24年度末にリニューアルオープンした淡路ワールドパーク ONOKORO においても来場者が増加している(29万7,000人・+51.5%)。しかしながら、淡路には宿泊施設が数多くあるにもかかわらず、宿泊客数が減少している。そこで、宿泊客数を増加させるために「スポーツアイランド淡路」を日帰りだけでは満足しないほどのテーマパークにし、合宿ができる施設にしていきたいと考える。そうした取り組みを通し、宿泊客数も増加し、スポーツツーリズムの発展にもつながると考えられる。

これまでの調査結果をまとめると、淡路島の宿泊観光客数が減少していること、さらに提言先として考える淡路ワールドパーク ONOKORO の来場者が増加していることが明らかとなった。そして、子どものスポーツ環境が悪くなり、運動する機会が減ってきているため、子どものスポーツ機会が増えることを望んでいることが再確認できた。そこで、私たちは以下の政策提言を行うこととする。

## 5. 政策提言

### 5.1. 「スポーツアイランド淡路」のテーマパーク

私たちは、子どものスポーツ環境を良くすること、スポーツをする機会を増やすことを

考えた結果、スポーツアイランド淡路をテーマパーク化することにした。その理由は、テーマパーク化することにより、種目関係なく子どもが自由に参加できる。また、遊び感覚でスポーツを行えるができ、その楽しさや喜びを味わう機会をすることでスポーツをする子どもが増える。さらに、子どもの体力も向上し、体力水準が高かった昭和 60 年を上回るよう、私たちは「スポーツアイランド淡路」のテーマパーク化することを力強く提言する。

#### 参考文献

原田宗彦 (2012) スポーツツーリズムの施策. 体育の科学, 62 (9), 678-682.

平成 25 年度兵庫県観光客動態調査報告書

平成 26 年度兵庫県観光客動態調査報告書 (速報)

文 部 科 学 省 (2000) ス ポ ー ツ 振 興 基 本 計 画 .

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/06031014/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014/002.htm)

文部科学省 (2012) スポーツ基本計画.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1319043.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1319043.htm)

文部科学省 (2013) 「体力・スポーツに関する世論調査」.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm)

文部科学省 (2015) 「体力・運動能力調査」.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k\\_detail/1362690.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1362690.htm)

一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー (2015)

<http://sports.okinawastory.jp/about>

スポーツ旅ガイド [www.okinawasportsisland.jp](http://www.okinawasportsisland.jp)

笹川スポーツ財団 (2014) 「4～9 歳のスポーツライフに関する調査」 2013.

山口志郎・山口泰雄・野川春夫 (2015) 市民マラソンのイベント効果が地域住民のイベントサポートに及ぼす影響: プリ・ポスト調査を用いた比較分析. 2014 年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, Vol4, No.1, 140-148.